



ASSITEJ Japan Center

題字：栗原一登

No. 112 (2011.1)

国際児童青少年演劇協会
日本センター
〈略称・アシテジ〉

〒102-0085

東京都千代田区六番町13-4

浅松ビル2A

T E L 03 (5212) 4773

F A X 03 (5212) 4772

Mail: centre@assitej-japan.jp

Web: http://www.assitej-japan.jp/

発行者 アシテジ日本センター



www.assitej.com info
17th ASSITEJ WORLD CONGRESS
AND PERFORMING ARTS FESTIVAL FOR YOUNG AUDIENCES
COPENHAGEN - MALMÖ | 20 - 29 MAY 2011

今年、第17回アシテジ世界大会

今夏、中国で「アジア会議」も開催

今年中国で「アジア会議」

昨年アシテジ日本センター

設立30周年事業「2010アジ

ア児童青少年演劇国際会議」が、

大きな成果を得たことは、前号

でも報告した通りである。

今年の「アジア会議」はその

成果をふまえて、8月に中国・

山東省で開かれる予定である。

アジアとの交流を重点とし

ているアシテジ日本センターと

しては、この「アジア会議」を

来年度の重要事業としていき

いと考えている。

「アジア会議」の開催時期に、

中国の児童青少年演劇の作品も

公演される予定なので、アシテ

ジ日本センターとして、少人数

でもツアーを組みたいと思う。

第17回「アシテジ世界大会」

今年3年に1回の「アシテ

ジ世界大会」の年。

5月20日～29日、デンマーク

のコペンハーゲンとスウェー

デンのマルメで開かれる。

世界の児童青少年演劇にあっ

ては、北欧諸国、とりわけデン

マーク・スウェーデンのレベル

は最高峰といわれ、世界中の児

童青少年演劇関係者も注目して

いる。

今回、デンマーク・スウェー

デンの作品のみならず、世界中

から公募した作品から厳選し、

現在の児童青少年演劇の到達点

ともいえる作品群を鑑賞できる

はずである。

彼らは、どこかで世界の児童

青少年演劇を制覇？したと思っ

ている感があり、その点でも彼

らはメンツをかけて、この「世

界大会」に臨んでいるはずであ

る(その意味でも期待はできる)。

アシテジ日本センターでは、

ツアーを組み、現在約60人程度

の申し込みがある(まだほんの

若干空きがあると思うので、「ト

ラベルキヤッツ」まで問い合わせ

せを)。

中国が次回大会に立候補か

前号の「アジア会議」の報告

でも触れたが、中国は次回の「世

界大会」の開催に意欲を見せて

おり、中国が立候補を表明した

場合、アシテジ日本センターも、

他のアジア諸国とともに、その

実現に向けて運動したいと考え

ている。

ちなみに開催が決まった場合、

「世界大会」のアジアでの開催

は、2002年の韓国・ソウル

大会について2度目となる。

(石坂)

3月20日は

「国際児童青少年演劇の日」

3月20日(日)、13時30分開演、両国・江戸東京博物館ホールで
劇団道化「吉林食堂」おはぎの美味しい中華料理店」を観ます

理事
小林由利子
佐藤嘉一
下山久
白石武士
鈴木龍男
ふじたあさや
林陽一
町永義男
山崎靖明

2011 迎春

ことしもよろしくおねがいたします

国際児童青少年演劇協会
(アシテジ) 日本センター

会計監査 鈴木 徹 相談役 多田 徹
土屋友紀子

会長 英静
副会長 文仁
事務局長 内木
理事 島田
細沼
石坂
石川
香川
上保
後藤
後藤
武弥

スウェーデンの演出家との共同作業

『ねむるまち』に取り組んで

下出 祐子

(劇団うりん(俳優))

2008年の冬、劇団うりん
ここではスウェーデンの国立劇団
で活躍しているバント・フー
グルント氏を招き「うりんこの
俳優によるスウェーデンスタイ
ルの芝居創り」が計画されまし
た。バント氏による演劇ワー
クショップや、北欧における児
童演劇の歴史の変遷、改革、発
展についてのプレゼンを受け、
実際の芝居創りを通して多くを
学びたいという目的を得たから
です。その後2009年の夏、
2010年の冬にそれぞれ一週
間ずつ、2010年の夏に五週
間、全部で50日間のバント氏
と劇団うりんこと共同作業を
経て『ねむるまち』という作品
が生まれました。

2009年8月の一週間に
は、ワークショップを交えなが
ら6人の出演俳優とスタッフが
平等な立場でアイデアを出し合
いました。そこで私たちが確認
したことは、台本ありきの作品
づくりではないという事です。
物語、音楽、スタッフワーク、
ダンス、全ての要素を組み合わ

せ「5才の子どもを含め、誰し
もが体験した事のある感情、感
覚」をちりばめた舞台を創り上
げる、そしてその出発点は「自
分自身」であるという事。ワー
クショップ初日に、俳優一人一
人が「5才当時の感情の記憶」
について語り合いました。

安心、幸福感、恐怖感、高揚
感、孤独感、様々な記憶が語ら
れ、それら全てが作品の中に取
り込まれてゆくのだというレク
チャーを受けました。バント
氏はこの一週間を「土台作り」
と呼び、俳優スタッフともにお
互いを尊重し合い認め合う「取
替え不可能なチームの基礎」を
創り上げました。

その後「土台作り」の一週間
の情報を基にバント氏による
作業が進められ、半年後の
2010年1月にはワーキング
スクリプト(台本の骨格)が提
示されました。そこには物語
各場面、配役、各場面の目的な
どが示されています。このワー
キングスクリプトを基に各シー
ンを実験的に立ち上げてゆく一

週間で、「誰が何を誰に何故語
るのか」を俳優スタッフ共に合
意していきました。そして又半
年後の2010年7月半ば、完
成台本と共にバント氏は再々
来日をし、そこからの5週間で
経て『ねむるまち』は完成しま
した。俳優、仮面、音楽、ムー
ブメント、厳選された少ない言
葉で綴られる「夢の劇」です。

6人の孤独な人物の6つの夢
を、マスクを付けた登場人物と
5人の語り手が演じます。観客
である子どもたちは劇場に入る
前に俳優たちのインフォメーシ
ョンを受けます。「すみません!
劇場内は雨が降っているので開
場は上演直前になります。舞台
に眠っている人がいるので起こ
さないように入場する子どもたち
俳優の誘導で入場する子どもたち



は、舞台で眠っている人物や子
守唄を奏でる人物を観察した
り、劇場の天井から滴り落ちる
水滴の音を楽しみながら客席に
着きます。俳優たちは上演中終
始子どもたちとアイコンタクト
を交わし、必要最低限の声で語
りかける。大音量などの刺激の
連続や、命令、コントロールで
はなく一つ一つの出来事にフォ
ーカスをしほり、場面のエネ
ジーやテンポの即興的变化によ
り子どもたちの想像力に働きか
けてゆきます。

6つの夢からは、心の闇が浮
かび上がります。帰る場所が無
い、何をしても満足できない空
しさ、コミュニケーションの方
法が見つけれられないなど、現代
社会が生み出した孤独な人間の
姿を、観客の子どもたちはその
まま受け止めます。舞台側の俳
優を驚かせたのは、子どもたち
の柔軟で俊敏で注意深いリアク
ションです。舞台の終演時に、
「自分が変われば世界は変わる」
という希望をプレゼントされた
のは舞台側の私たちの方かもしれ
ません。

バント氏との50日間は、そ
のまま児童文化の未来を考える
50日間でした。「真の芸術作品は
私たちの心を揺り動かす、大き
なトラウマとなる経験を克服す
る道を与えてくれるのである」
というスウェーデンの「子ども



の文化」という冊子の表紙の言
葉は私たちの活動の根源に触れ
るものです。国の文化予算の比
較からも私たち日本の児童劇団
の苦難は明らかですが、子ども
たちの心の栄養になる舞台を作
り出し公演の機会を生み出す使
命は国境を越えます。バント
氏の言葉を借りるならば、本来
子どもたちは「可能性の雲」を
持つていて私たちの仕事はそれ
を広げる事です。大きく育った
「可能性の雲」は私たちの現実
を変える一歩になるに違いあり
ません。『ねむるまち』は201
0年8月の公演の反響から、2
012年4月5月に首都圏で
の再演が計画されています。再
演の機会が、新たな第一歩に
なることを信じてやみません。

土方与平さんの芸術文化への姿勢に改めて感動

—土方与平著『或る演劇製作者の手記』を読んで

アシテジ日本センター副会長 大野 幸則

昨年、6月中旬に「或る演劇製作者の手記」（以下「手記」）が届き、その軌跡に引き込まれるように読み終えました。

2010年は、土方与平さんが尽力された活動の一つ、アシテジ日本センター設立30年の年でもありました。

また、新政権の文化政策が平田オリザ氏を軸に語られ、並行する形で芸団協の「実演芸術家の将来ビジョン2010」が練られ、文化庁の文化政策部会審議経過報告がまとめられ、事業仕分けを経てという、文化にとって画期をなす年でもありました。

「手記」を読み進み、土方さんの来し方に触れ、現代の芸術文化の課題に先駆的に挑み、学びを実現してきた姿勢に改めて感動した次第です。

●世界理事に最高点で当選

土方さんが最初にアシテジ世界理事に選出されたのが1990年の第10回ストックホルム大会でのことでした。

当時のアシテジ日本センター会長栗原一登氏によれば、

「かたずをのむ各国代表の前

に、選管の代表が立ち上がった『ジャポン』最初の一声がそれであった。続いて『87票』と

たんに各国代表のほとんどが立ち上がり、拍手とともに歓声が上がった。わたしは、胸底から涙腺に突き上げて来る感情に堪えて、隣りにいた最高当選者の土方与平さんの手を握りしめた。」と、あります（『アシテジ』No.30）。

その時も、土方さんに、いくつかの国から会長か副会長就任の要請がありました。土方さんは固辞されたと聞いています。

●各国の演劇事情に精通
フランスをはじめスウェーデン、ソ連、ドイツ等々、多くの国の方々との交友を通して、その国の演劇事情を実に綿密に調査され、そこから学ぼうとする姿勢に驚かされます。

新たな文化政策のひとつは、フランスの劇場と演劇・芸術の有り様を日本にも導入するとうもの。中核となる公共文化施設に芸術監督等を配置し、地方に芸術発信拠点を作り出すというもののようです。少

し極論かもしれませんが、落下傘部隊のように芸術監督を地方に派遣したからと言って、その地域が国の新たな芸術拠点になるという考えがよく理解できませんでした。

土方さんが語るフランスの地域での劇場の成り立ちは、情熱を持った演出家などがその地に根ざし、長年にわたって劇団と地域が文化・芸術を育てていく関係をつくり出した結果だと私には読み取れました。

●佐野碩さんのこと
因縁めいたお話しも興味深く読ませていただきました。リヨンで開かれたアシテジ総会で、小山内薫が協会の名誉会員として顕彰されたその時の話です。

「大会会場で、戦前のプロレタリア演劇運動の活動家の一人、演出家の佐野碩さんの弟子のメキシコ演劇人に出会いました。佐野さんは私が小さいときから知っていた人で、わが一家とともにモスクワで過ごし、スターリン時代の不当な処置によりソ連を追われてフランスに移り、後に単身メキシコに渡った

のです。メキシコで演劇を教え、今日ではラテンアメリカ現代演劇の父とも言われていますが、ついに日本へ一度も戻ることなく、数年前かの地の土となりました。そのメキシコ演劇人は佐野さんのデスマスクまで取った人で、私は何か不思議な親しみを、その人々に感じました。」

●土方家について

土方家について少し触れます。昨年のNHK大河ドラマは「龍馬伝」。土方与平さんは幕末の志士・土佐藩上士土方久元の曾孫となります。坂本龍馬、中岡慎太郎とともに薩長同盟に向けて奔走、伯爵、勲功華族。孫に当たる土方与志は皆様ご存じのように小山内薫に師事し、築地小劇場を開く。

日本プロレタリア演劇同盟の代表としてソ連を訪問。第1回ソヴエト作家同盟で日本代表として小林多喜二虐殺や日本の革命運動について報告を行った。その内容はまもなく日本に伝わり、爵位を剥奪される。土方は帰国せず、そのままソ連に亡命。スターリンの粛正期にさらにフランスへと移る。

家族の一員として同行していた与平さんの話が「手記」で語られています。

●実は土方さんの訳詞

土方さんは外国のお客様をお連れして私どもの「ともしび」

の店によく来て下さいました。うたごえ喫茶では歌集を使って一緒に歌っているわけですが、伝統的に沢山のロシア民謡が載っています。その訳詞の幾つかが中央合唱団となつていますが、実は土方さんの訳詞だと言ったことでした。ご本人の名前を出さないとどこにお人柄が感じられました。

また、戦後全国を席卷したうたごえ運動は関鑑子（あきこ）が起こし、主宰したことになっています。この時期の古い資料をたまたま手に入れて驚いたこと、関鑑子氏を引っ張り出し、中央合唱団を立ち上げたのが実は土方さんだったと記されていたことでした。「偲ぶ会」で娘さんの小野光子（てるこ）さんが「お母さんは土方さんを恨んでいる。引っ張り出して一年もいないでいなくなつた」という趣旨のことを冗談交じりに話されていらつしやいました。

「手記」は土方さんの生き様の歴史、過去です。しかしその体験とその場に、生きてきた土方さんの記録は、なんと現代の私たちにとって多くの学べべき事を含んでいることでしょう。

日本の児童青少年演劇の「これから」を考え、さらに進めて行きたいと心を新にするものです。

※A5判、440頁。本の泉社。2095円＋税。

アシテジ日本センターの歴史を振り返る⑬

―青天の霹靂、世界理事に選出―

石坂 慎二

(アシテジ日本センター事務局長)

アメリカの力で理事国に

私は前回の最後に「日本とアメリカの絆がぐーんと深まったことは確かだ」と書いた。

アメリカとの絆、それはアメリカセンターのアン・ショウ会長との絆である。以後、アン・ショウ会長はいろんな面で、日本センターのメンドウをみてくれることになる。

その最も顕著なのが、第8回「アシテジ・モスクワ世界大会」で理事国に選出されたことである。「モスクワ大会」は「ルイジアナ」(6月)の後の、1984年9月に開催されている。

何等、選挙運動をすることもなく、オーストラリア、チェコスロバキアに次いで3位当選を(キユーバ・西ドイツと同数)果たしている。アシテジに加盟してまだ4年、何等顕著な活動をしていない国が、歴史あるソ連・アメリカ・イギリス等を押しのけて3位当選である。

確かに1979年の西ドイツ

公演から始まった風の子の海外公演は評価が高く、日本への評価も高まったことがあったとしても、である。

陰からアン・ショウさんの尽力があったことは確かである。

日本側にとつて、理事国に選出されたことは、青天の霹靂だったらしい。

当初は、ただただ世界的に認知されたと喜んでいたらしいが、大会直後の理事会に出席してみると、当時の日本センターの実力を超えた期待と義務がのしかかり、さすがに躊躇、引いている感がある。

「モスクワ世界大会」は

ここで「モスクワ大会」について触れておく。

参加者は、栗原一登・多田徹・道井直次・落合聰三郎夫妻・富田博之・石岡三郎夫妻・伊藤巴子・大井数雄夫妻と永野むつみさんたち人形劇団カラバスの方々、総員14名であった。「モスクワ大会」について、2

▲アン・ショウ会長と栗原会長



人の方の「印象記」から抜粋しておく。ある程度の雰囲気を感じていただければ幸いである。

「レーニン丘にそびえたつこの劇場は、ソヴィエトの児童・青少年演劇の生みの親、育ての親であるナタリーヤ・サーツ女のひきまいる劇場で、彼女はアシテジのソ連代表である。紫のロングドレスに身を包み、栗毛色に染め抜いた頭髮で、到底八十数歳とは見えぬ若々しいでたちで登場した彼女は開会の挨拶を行なった」(道井直次「アシテジ」NO12)。

あの「女帝」の偉そうな、ふんぞりかえった姿が目につかぶ。「各国代表に通訳をつけている。参加国は三〇カ国を超えていたから、これだけでも、たいへんな経費だろう。さすが社会主義大国だと思ったことだった。

それにしても、ソ連センターの力の入れようは相当なものであり、国の威信をかけての国家的行事のように思われた」(富田博之「児童演劇」NO288)。

ただただ佐渡へ、佐渡へと

ここで1984年頃の、日本の児童青少年演劇の状況を述べておく必要がある。

日本の児童青少年演劇は、この頃ただひたすら、1985年8月に佐渡島で開かれる「第1回全日本子どものための舞台芸術大祭典」に向かっていた。

日本の児童青少年演劇は、1970年代の中盤から、「子ども劇場・おやこ劇場」の飛躍的な発展とともに1990年代の序盤まで、まさしく我が世を謳歌するがごとく、花盛りであった。そのシンボルといえるのが「佐渡大祭典」であった。

この「佐渡大祭典」構想は、1980年に提起され、長年にわたって準備を進めていた。

詳細は、佐渡での「国際シンポジウム」の際に触れると思うので、ここでは、この頃、児童青少年演劇の全てが「佐渡大祭

典」に向つていた、ぐらいいしておく(もちろん、アシテジ日本センターも例外ではなかった)。

前進座のリヨン公演

我が世界が「佐渡大祭典」一色のなか、その4カ月前の4月に、「アシテジ日本センター主催・四劇団を海外へ送る夕べ」が開かれている。

四劇団とは、前進座・ひまわり・風の子・むすび座。

ひまわり・風の子・むすび座はいずれも関矢幸雄演出作品で、カナダのバンクーバーフェス等、カナダ国内各地での公演。前進座は、「リヨン国際児童青少年演劇祭」他の招待。

この時、リヨンでは、「日本の児童青少年演劇展」が開かれている。海外での初の日本の「演劇展」ということで、かなり興奮し、いろんなところへ呼びかけ、数多くの展示品が各団体から寄せられたことを覚えている。

リヨンは、土方与平さんの親友、モーリス・イエントさんの本拠地。土方さんの尽力があったことはいうまでもない。前進座のリヨン公演が圧倒的に高い評価を得たことは、日本としても誇るべきことであった。

【編集委員】石坂慎二、上保節子、菊田朋義、林陽一、ふじたあさや